

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：11201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770116

研究課題名(和文) ジャンヌ・ダルクをめぐるペギーとベルナノスの文学創作

研究課題名(英文) Study of literary works on Joan of Arc by Charles Peguy and by Georges Bernanos

研究代表者

中里 まき子 (NAKAZATO, Makiko)

岩手大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：40455754

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：ジャンヌ・ダルクを題材とするシャルル・ペギーの作品(『ジャンヌ・ダルク三幕劇』(1897)、『第二徳の神秘劇の大門』(1911)等)とジョルジュ・ベルナノスの作品(『戻り異端で聖女のジャンヌ』(1929)等)を、ペギー『われらの青春』(1910)やベルナノス『良識派の大恐怖』(1931)に照らして再読した。その結果、両作家の文学テキストにおけるジャンヌ・ダルクの「沈黙」が、言語に対する彼らの批判的な眼差しを具現化するものであることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：We examined literary works on Joan of Arc by Charles Peguy and by Georges Bernanos (Joan of Arc (1897), The Portal of the Mystery of Hope (1911) by Peguy, Joan Relapsed and Saint (1929) by Bernanos, etc.) making reference to Peguy's Our Youth (1910) and Bernanos' The Great Fear of Right-Thinking People (1931), and we concluded that the "silence" of Joan of Arc in the works of these authors represents their critical views of language.

研究分野：フランス文学

キーワード：ジャンヌ・ダルク シャルル・ペギー ジョルジュ・ベルナノス

## 1. 研究開始当初の背景

(1) ジャンヌ・ダルク（1412～1431）は、15世紀のクリスティーン・ド・ピザンをはじめ、シェークスピア、シラー、ヴォルテール、サンド等、多数の作家たちの創作意欲を刺激してきた。しかしそれに比して、彼女を素材とする文学作品が研究対象とされることは少なく、その文学史上での意義も明確にされてこなかった。こうした認識から研究代表者は、2012・2013年に、科学研究費助成事業若手研究（B）採択課題「ジャンヌ・ダルク処刑裁判を題材とする文学創作に関する研究」に取り組み、その結果、下記のような知見を得た。

① 1840年代に校訂版が刊行されたジャンヌ・ダルク処刑裁判記録は、この人物の言動を伝える貴重な歴史資料であり、多数の文学作品の着想源となった。しかし20世紀の作家たちは、裁判記録を参照し、その重要性を認めながらも、自らの創作においては、とりわけジャンヌが聞いたという神のお告げの「声」とジャンヌ自身の「声」に関して史実を「歪め」、独自の解釈を提示した。

② 20世紀の多数の作家（アヌイ、プレヒト、モールニエ等）が、神の沈黙に苦しみながらも裁判官たちに果敢に抗弁するジャンヌの姿が描いたのに対し、ジョルジュ・ベルナノス（1888～1948）は、エッセー『戻り異端で聖女のジャンヌ』（1929）において、法廷で裁かれるジャンヌを寡黙な少女として描き、彼女の雄弁さを強調する他の作家たちの傾向を疑問視した。

(2) 2014年はシャルル・ペギー（1873～1914）の没後百周年にあたり、それを記念して7月に、フランスのスリジー・ラ・サル国際文化研究センターにおいて8日間にわたる国際シンポジウム「ペギーの〈声〉：現代に響くこだま」が実施された。本シンポジウム開催に向けて、ジャンヌ・ダルクに最も多くの作品を捧げたこの作家について、「声」という観点から再検討する気運が高まっていた。

## 2. 研究の目的

20世紀のジャンヌ・ダルク表象を概観すると、この人物に関心を示した作家の多くが、処刑裁判記録に響き渡る彼女の声に魅せられ、作品においてその雄弁さや知的で洗練された言語活動を強調したことがわかる。一方、シャルル・ペギーとジョルジュ・ベルナノスは、ジャンヌ・ダルクの沈黙に心を寄せた。本研究は、ジャンヌ・ダルクを題材とするペギーとベルナノスの諸作品を、言語に対する問題意識に照らして読み直すことにより、両作家の文学創作の再評価を行うことを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) ジャンヌ・ダルクを題材とするペギーの作品のうち、第一作目『ジャンヌ・ダルク三幕劇』（1897）のヒロインは雄弁な少女であ

るが、『ジャンヌ・ダルクの愛徳の神秘劇』（1910）、『第二徳の神秘劇の大門』（1911）、『聖なる嬰兒たちの神秘劇』（1912）という『神秘劇』三部作を通して、ジャンヌは語る主体から聞く主体へと変貌していく。ペギーによるジャンヌ・ダルク解釈の変遷——雄弁な少女から寡黙な少女へ——を辿りながら、この変容とペギーの言語観との相関関係を探る。

(2) ベルナノスは、小説等のいわゆる文学作品にジャンヌ・ダルクを登場させることはなかった。しかし、文学的エッセー『戻り異端で聖女のジャンヌ』（1929）を発表した以外にも、論戦文の随所でジャンヌ・ダルクに言及しているため、小説にも、この人物をめぐる考察が反映されていると推測される。この仮説を検証するべく、ヒロイン同士の類似性が指摘される『戻り異端で聖女のジャンヌ』と小説『欺瞞』（1927）及び『歓び』（1928）を、「言葉」と「沈黙」に着目しつつ比較検討する。また、当時の社会状況に基づくベルナノスの言語観を『良識派の大恐怖』（1931）に探り、同作家が描く「寡黙なジャンヌ・ダルク」との関わりを明らかにする。

(3) フランスの研究者や研究組織、とりわけボルドー・モンテーニュ大学の研究センター「モデルニテ」の研究者と緊密な連携をとり、研究資料の提供や助言を受け、フランスで研究成果を発表する。

## 4. 研究成果

(1) ペギーの文学作品を、社会的・宗教的立場や時代背景（ドレフュス事件）と関連づけながら再読することにより、二つのジャンヌ像——雄弁なジャンヌと寡黙なジャンヌ——がそれぞれに、この作家の言語観を反映することが明らかになった。

① まず、第一作目『ジャンヌ・ダルク三幕劇』のヒロインについては、ソフォクレス『アンティゴネ』の影響が先行研究によって指摘されてきた。ペギーのジャンヌ・ダルクとソフォクレスのアンティゴネが、雄弁かつ論争的な性格を共有することに加えて、本研究では新たに、彼女たちがいずれも、自らの行動について偽らずに真実を述べたいと切望しており、そのことが二人の死を招くという共通点を論証した。

② 一方、ペギーがカトリック信仰に回帰した後に書いた『神秘劇』三部作のうち、『第二徳の神秘劇の大門』と『聖なる嬰兒たちの神秘劇』では、ジャンヌは修道女ジェルヴェーズの語りは無言で耳を傾ける。本研究においては、このジャンヌの沈黙が、作品において主題化される沈黙と響き合っていることを指摘した。『第二徳の神秘劇の大門』最終部において、神の語り声が、沈黙の夜によるイエスの埋葬を語り終えると同時に自ら沈黙に帰する時、物語を無言で聞いていたジ

ジャンヌの沈黙は、夜の沈黙、神の声の沈黙、そして十字架上で休らうイエスの沈黙に合流する。また、『聖なる嬰児たちの神秘劇』では、言語習得以前に命を落とした聖嬰児たちと無言のジャンヌとが重ねられる。

上記②で示した寡黙なジャンヌ像へのペギーの傾斜の背景には、1890年代のドレフュス事件の経験があったと考えられる。『われらの青春』（1910）においてペギーは、雄弁な人々の介入によってドレフュス事件が衆愚政治に陥ったとしても、沈黙を守る寡黙な人たちの手でドレフュス主義の神秘は守られたと述べる。さらにペギーは、この寡黙な人々がドレフュスの無実を明言することによって身を滅ぼしたことを指摘しており、この人々の姿は、自分の言葉が死を招くと知りつつ語った上記①のジャンヌ・ダルクやアンティゴネと一致する。このように対比的な二つのジャンヌ像は、『われらの青春』に示されるペギーの言語観によって有機的に連結される。こうした研究の成果を、国際シンポジウム「ペギーの〈声〉：現代に響くこだま」において発表し、多様な国籍の研究者と議論する機会を得た。

(2) ベルナノスの文学的エッセー『戻り異端で聖女のジャンヌ』を軸として、その前後に書かれた評伝『良識派の大恐怖』と小説『欺瞞』及び『歓び』を対比的に検討することにより、この作家の「寡黙なジャンヌ・ダルク」への関心が、どのような社会的背景を持つか、また、いかに文学創作に反映されたかを探り、下記の知見を得られた。

① ベルナノスがエドゥアール・ドリユモンの評伝である『良識派の大恐怖』を執筆したのは、第一次世界大戦期のプロパガンダによって言語が失墜した状況においてこそ、若者たちに文章の正しい読み方を教えるドリユモンの存在意義が増すと考えたためであった。

② 言語の喪失の意識は、ベルナノスを、純粋な言葉、聖なる言葉の探求へと向かわせた。その探求の軌跡を『戻り異端で聖女のジャンヌ』に見出すことができる。この文学的エッセーでは、1431年のルーアンにおけるジャンヌ・ダルク処刑裁判が、少女の純粋な言葉と、裁判官たちの欺瞞的な言葉とが対峙するドラマとして提示される。五ヶ月に及ぶ尋問が、ジャンヌの魂を枯渇させ、徐々に言葉を奪っていくとすれば、それは同時に、彼女の聖なる言葉に傷ついた裁判官たちが迫害者へと変貌していく過程でもある。そしてこの構造は、小説『欺瞞』及び『歓び』を読み解くための手がかりともなる。すなわち、ベルナノスが描いた「裁かれるジャンヌ」と同様、二小説の主人公シャンタル・ド・クレルジュリの純粋な言葉が周囲の大人たちを傷つけ、そのため大人たちは迫害者へと変貌し、少女は人々の贖罪のために死に至るのである。

③ ベルナノスは『戻り異端で聖女のジャン

ヌ』において、ジャンヌを追い詰める裁判官たちの空疎で偽善的な発言を執拗に書き記したように、『欺瞞』では、言葉を失った大人たちの姿を、セナーブル神父を中心に描いている。信仰を喪失したにもかかわらず司祭であり続ける欺瞞者セナーブルの存在は、ベルナノスにとって信仰の喪失と言語の喪失とが一致することを示唆している。

④ 続く『歓び』では、セナーブルら欺瞞的な大人たちと清純な若い女性シャンタル・ド・クレルジュリとの対峙が描かれる。信仰ゆえの光明に満たされたシャンタルの存在は、欺瞞の側にいる人々に自己の暗黒面を直視させ、その結果、彼らを迫害者へと変貌させる。ベルナノスの文学テキストにおいて、「裁かれるジャンヌ」や「聖女シャンタル」の声が大人たちの言葉によってかき消され、沈黙に帰することは、この作家の悲観的な眼差しを反映すると考えられる。

上記の成果を論文「言葉なき世界のエクリチュール：ジョルジュ・ベルナノスの文学」として発表した。

(3) ジャンヌ・ダルクの多様な表象と、フランス社会におけるその意義について理解を深めるため、研究協力者であるボルドー・モンテーニュ大学のエリック・ブノワ教授を招聘し、特別講演「世界大戦期のレオン・ブロワとジョルジュ・ベルナノスにおける救済する女性像とジャンヌ・ダルク」を実施した。フランス語の講演の和訳を行い、訳文を著書『文学における宗教と民族をめぐる問い』に掲載した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

① Makiko NAKAZATO, « Les seize carmélites de Compiègne, martyres pendant la Révolution », *Artes Liberales*, 第99号, 岩手大学人文社会科学部, 2016, pp. 45-51, 査読無

② 中里まき子, 「言葉なき世界のエクリチュール：ジョルジュ・ベルナノスの文学」、『仏語仏文学研究』、第49号、東京大学仏語仏文学研究会、2016、pp. 435-450、査読有  
<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/bitstream/2261/61684/1/ff049026.pdf>

③ Makiko NAKAZATO, « La voix et le silence de Jeanne d'Arc écoutés par Péguy », *Voix de Péguy, échos, résonances*, Classiques Garnier, 2016, pp. 185-199, 査読無

④ 中里まき子, 「シャルル・ペギーのジャンヌ・ダルク像：その声と沈黙」、『欧米言語文化論集』、第2号、岩手大学人文社会科学部欧米言語文化コース、2015、pp. 123-134、

査読無

〔学会発表〕(計3件)

① 中里まき子、「ジャンヌ・ダルクとアンティゴネ」、国際研究集会「響き合う女性像：ジャンヌ・ダルクとアンティゴネ」、2016年12月21日、岩手大学(岩手県)

② Makiko NAKAZATO, « Les seize carmélites de Compiègne, martyres pendant la Révolution », 国際シンポジウム「文学と芸術における宗教・民族をめぐる問い」、2016年7月9日～2016年7月10日、岩手大学(岩手県)

③ Makiko NAKAZATO, « La voix et le silence de Jeanne d'Arc écoutés par Péguy », Colloque « Voix de Péguy : Quels échos aujourd'hui ? », 2014年6月30日～2014年7月7日、スリジー・ラ・サル(フランス)

〔図書〕(計1件)

① 中里まき子、他、朝日出版社、『文学における宗教と民族をめぐる問い』、2017、pp. 57-67

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中里 まき子 (NAKAZATO, Makiko)  
岩手大学・人文社会科学部・准教授  
研究者番号：40455754

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

### (4) 研究協力者

エリック・ブノワ (BENOIT, Eric)  
ボルドー・モンテーニュ大学・文学部・教授